

特集 今日から役立つ **フレイルの知識とケアのポイント**

<疾患とフレイル予防, ケア>

聴力低下

杉浦彩子

豊田浄水こころのクリニック 副院長 / 国立長寿医療研究センター 耳鼻いんこう科 非常勤医師

Point

- ▶ 難聴は認知機能低下, 社会的孤立, 抑うつ の危険因子である
- ▶ 感音難聴では小さな音が聞こえにくいだけでなく, 音の弁別なども低下する
- ▶ 難聴者では補聴器や外耳道衛生などの定期的なチェックが必要

はじめに

聴覚は会話コミュニケーションを行うためには必須の感覚であり, 聴力低下による難聴がある場合, 会話のキャッチボールがスムーズにいきません。そのことは患者本人だけでなく, 患者の周囲

にも大きな影響を及ぼします。ここでは難聴の頻度, 難聴について知っておくべき基礎知識, 難聴者への対応について概説します。

難聴の疫学

先天性の重度難聴は最も多い先天性疾患であり, 出生約 1000 人に対して 1 人の頻度です。また, 加齢性難聴は数ある老年症候群のなかでも最も頻度が高く, 日常会話に支障をきたしてくる中等度以上の難聴者は 60 代では約 1 割, 70 代では約 3 割, 80 代では約 4 割となります¹⁾。高齢者では難聴があっても自覚に乏しい場合があり, マスクをした状態での会話がスムーズにいかない場合は聴力評価をする必要があります。

社会的孤立や抑うつ の危険因子でもあり³⁾, フレイルの観点からはとくに精神・心理的フレイルや社会的フレイルとの関連が指摘されています^{4,5)}。難聴とフレイルの関係は一方的なものではなく, 双方向, 同時進行的な面もありますが, 補聴器を装着している難聴者では認知機能低下が抑制される可能性が報告されており⁶⁾, 症例によっては補聴器装着後にフレイルが劇的に改善する場合があります⁷⁾。

難聴は認知機能低下のリスクを高め²⁾, また,

難聴の種類と対応

伝音難聴と感音難聴

難聴には外耳・中耳が原因で音の伝わりが悪くなることによる「伝音難聴」と, 内耳以降に障害があることによる「感音難聴」があります。図 1 に言葉の聞き取りを視覚的に表しましたが, 伝音難聴は B, 感音難聴は D に近い状態です。感音難聴では小さな音が聞こえづらくなるだけでなく, 音と音聞き分ける弁別能も低下する, 大きな音は響いてしまい快適に聞こえる音の範囲が狭くなる, といった特徴があります。そのため, 補聴器の装着を嫌がる, 補聴器を装着できても効果に限界がある, といった問題が起こります。近年のデジタル技術の進歩で, 軽度難聴者や感音難聴者でもより効果的な装着が可能になってはきていますが, 騒音下での聴取にはいまだ限界があります。また, 電池切れや耳垢による音孔の閉塞で, 音の出てい

ない補聴器に気づかないまま装着している高齢者も少なくなく, そのときの聴力に合った調整と定期的な点検が欠かせません。

高齢難聴者への対応のポイント

高齢難聴者では補聴器を装着していたとしても, 周囲が静かな環境で 1対1 で口元をみせながらゆっくりはっきり話すこと (図 1 の A を目指すこと) が必要です。大きすぎる声だと話し手も感情的に高ぶりやすく, 疲れやすくなります。聞き手も同様で怒られているように感じることもあります。また, 難聴者の特徴として, 内容がわからなくても返事をする, だいたいの内容がわかっているにもかかわらず固有名詞を聞き間違えている, といった点があります。マスクがあると高周波数領域の音波が伝わりにくくなるうえ, 口元が見えなくなることで視覚の手がかりがなくなってしまい, 健聴者でも聞



図 1 言葉の聞き取りを視覚的に表したもの